

ヒエロニウムス「ウルガータ聖書序文」 翻訳と注解 (3)

ソロモンの書、エズラ記・ネヘミヤ記、歴代誌、五書

Jerome's Prologues of the Vulgate: Japanese Translation
with Commentary (3)

Books of Solomon, Ezra / Nehemiah, Chronicles, Pentateuch

石川 立 加藤 哲平
Ritsu Ishikawa Teppei Kato¹

キーワード

ヒエロニウムス、聖書、ウルガータ、序文、ソロモンの書、エズラ記、ネヘミヤ記、
歴代誌、五書

KEY WORDS

Jerome, the Bible, the Vulgate, Prologue, Books of Solomon, Ezra, Nehemiah,
Chronicles, Pentateuch

ソロモンの書（箴言、コヘレト書、雅歌）の序文

解 題

本序文の中でヒエロニウムスは、名宛人であるクロマティウスとヘリオドルスに対し、送金の礼を述べている。ベツレヘムにおいてヒエロニウムスが設立した修道院の資金の多くは、ローマの貴族であったパウラの財産から賄っていたが、友人たちの依頼で翻訳や注解を作成することで、彼らからの援助をも受けていたようである。ソロモンの書もそうした状況の中で翻訳された。ソロモンの書とは、箴言・コヘレト書・雅歌をまとめて指す呼び名である。ヒエロニウムスによれば、箴言の代わりにヘブライ語で書かれたシラ書が一緒になったものもあったというが、これは重要な証言であ

る。現在外典として読まれているシラ書はギリシア語訳されたものであり、長い間ヘブライ語原典は失われたと思われていたが、19世紀の終わりにそのヘブライ語テキストが発見されたことで、ヒエロニウムスの証言が裏付けられた。またヒエロニウムスの正典論に関しては、もともとギリシア語で書かれていたと思われるソロモンの知恵はともかく、ヘブライ語テキストが存在したシラ書をも教会の正典に含めるべきでないとしていることから、彼が重要視していたのはテキストの言語ではなく、ユダヤ人の正典観そのものであったことが伺われる。序文自体は、393年頃にクロマティウスとヘリオドルスに宛てて書かれた。

翻 訳

ソロモンの書におけるヒエロニウムスの序文が始まる

クロマティウスとヘリオドルスの両司教⁽¹⁾にヒエロニウムスが挨拶を送る。

司教職が結びつけている者たちをこの手紙が（さらに）結びつけんことを。またキリストの愛が結びつけている者たちをこの手紙が分けることのなからんことを。ホセア〈Osee〉、アモス〈Amos〉、ゼカリヤ〈Zaccharia〉、マラキ〈Malachia〉の注解をあなたがたはご所望であるが、健康が許したならば、私はそれらを書いてきたことだろう⁽²⁾。我々が最大限の能力をあなたがたのために発揮できるようにと、あなたがたは出費の補填分を送金してくれたし、我々の筆記者や写字生をも支えてくれた。しかし見よ、（私の注解を）催促する者らの様々なから騒ぎがたびたび脇のほうから持ち上がってくるのであった。それはあたかも、私があなたがたのために骨折るのとほかの空腹な者たちのために骨折るのが等しく、それどころか（翻訳と礼の）授受に関して私があなたがた以外の誰かに責任があるのだといわんばかりである。私は長い間病気で弱っていたけれども、この年はまったく沈黙してしまったり、口を閉ざしたりすることがないように、あなたがたの名のために三日間の仕事を捧げた。それはもちろん、ソロモンの三巻の翻訳のことである。すなわち、普及版⁽³⁾〈vulgata editio〉では Proverbia と呼ばれる、ヘブライ人の箴言〈Parabolae〉であるマスロット⁽⁴⁾〈Masloth〉、またギリシア語では Ecclesiastes、ラテン語では伝道者〈Contionator〉と言われるコエレト⁽⁵⁾〈Coeleth〉、そして我々の言語で詩の中の詩〈Canticum canticorum〉と訳されるシラッシリム⁽⁶⁾〈Sirassirim〉である⁽⁷⁾。

ところで、シラクの息子イエスの書は「道徳的⁽⁸⁾」と見なされ、ソロモンの知恵と題されるもうひとつの書は「偽典⁽⁹⁾」と見なされている。これらのうち前者のほうを私はヘブライ語でも発見した⁽¹⁰⁾。それはラテン語のそれのように集会の書〈Ecclesiasticus〉ではなく、諺〈Parabolae〉と題されている。これにはコヘレト書と

雅歌が一緒になっていたので、ただ書物の数だけではなく、題材の類型に関してもソロモンの書と等しいものであった⁽¹¹⁾。(一方) 後者はヘブライ人のもとにはない。それどころか文体そのものもギリシア的な雄弁の匂いがする。少なからぬ古代の作家たちは、この書をユダヤ人フィロンの手になるものと断定している⁽¹²⁾。それゆえに、教会がユデイト記やトビト記やマカバイ記の書物を読んではいても、それらを聖典に受け入れてはいないのとちょうど同じように、これらの二つの書物も平信徒の教化のために読むべきであり、教会教義の権威を確立するために読むべきではない。

セプトゥアギンタの翻訳者たちの版をより気に入っている者のためには、我々がかつて修正した版がある(ので、そちらを読めばいい)。というのも我々は、旧版を破壊するようにして新版を作り上げているわけではないからである⁽¹³⁾。しかし丹念に読めば、我々の版(今回の翻訳)の方がもっと評価されるべきものだと分かるであろう。我々の版は、第三の容器に注いで酸っぱくなってしまったものではなく、搾り機から最も純粋な容器にすぐさま委ねられ、その風味を損なわなかったものなのである⁽¹⁴⁾。

序文終わり

訳注

- (1) クロマティウス (Chromatius) はアクイレイア司教、ヘリオドルス (Heliodorus) はアルティヌム司教。両市ともイタリア北東部アドリア海沿岸の町。ヒエロニウムスは若い頃 (370-73年) アクイレイアでしばし修道生活を送ったが、クロマチウスとはそのときに知り合った。ヘリオドルスとはさらに古い付き合いで、ローマ遊学時代 (363-66年) に机を並べて文法学者アエリウス・ドナトゥスの講義を聞いた仲である。
- (2) ホセア、アモス、ゼカリヤ、マラキの注解は406年に執筆されたとされており、この時点ではまだ書かれていない (Cavallera, F., *Saint Jérôme: sa vie et son œuvre* (Louvain / Paris, 1922) II: 163)。
- (3) ヒエロニウムスによる *vulgata editio* という言葉の用法は一定していない。文字どおりには「普及版」という意味であるから、当時普及していた LXX、あるいは古ラテン語訳を指していると考えられる。しかしそのどちらを指しているのかは文脈によって判断するしかない。また場合によっては、ヘクサプラ改訂以前の LXX テキストのみを指していることもあれば (*Ep.*106)、さまざまな改訂を経たのちのヒエロニウムス当時の κοινή (共通) テキストだと主張することもある (*Comm. in Esaiam*, Praef. Lib. XVI)。Sutcliffe, E.F., "The Name "Vulgate" ," *Biblica* 29 (1948): 345-52参照。

- (4) 箴言は LXX では「箴言」(Παροιμίαι) と題されているが、ヘブライ語では「(ソロモンの) 知恵」という意味で、スミフート形の「ミシュレイ (・シュロモー)」(מִשְׁלֵי שְׁלֹמֹה) と呼ばれる。しかしヒエロニムスはここで、Masloth というあたかも女性複数形のようなかたちを示している。「マシャール」という語自体は男性形であるため不可解である。
- (5) コヘレト書は LXX では「伝道者」(Ἐκκλησιαστής) と題されており、ヘブライ語でも同様に「コヘレト」(קֹהֶלֶת) と呼ばれる。
- (6) 雅歌は LXX では「歌」(ἄσμα) と題されているが、ヘブライ語では、ヒエロニムスが「歌の中の歌」(Canticum canticorum) とラテン語訳しているように、「シル・ハシリーム」(שִׁיר הַשִּׁירִים) と呼ばれる。
- (7) この部分の関係代名詞は、Masloth に対しては女性複数、Coeleth に対しては男性単数、Sirassirim に対しては中性単数となっている。すると一見これは先行詞のヘブライ語の性数を受けているようにも思えるが、Sirassirim に対し、ヘブライ語には存在しない中性形を当てていることから、そうではないといえる。おそらくは、関係節中のラテン語 Parabolae (*f. pl.*), Contionator (*m. sg.*), Canticum (*n. sg.*) を先行詞に敷衍して性数を決定しているのであろう。
- (8) παναρετος.
- (9) ψευδεπιγραφος.
- (10) シラ書はもともと、「シラ・エレアザルの子、エルサレムに住むイエスス」[シラ50:27] によってヘブライ語で書かれたものであるが、外典として現在読まれているのは、ヘブライ語原典をイエススの孫がギリシア語に翻訳したものである。訳者である孫は、「エウエルゲテース王の治世の38年」[シラ序文27]、すなわち前132年頃にエジプトに滞在して祖父の書を翻訳し始めたこと述べており、そこからヘブライ語原典は前180年頃に書かれたと思われる。シラ書のヘブライ語テキストに関する、カイロ・ゲニザでのソロモン・シェヒターによる調査については、Kahle, P.E., *The Cairo Geniza* (Oxford: Basil Blackwell, 1959): 3-13参照。またクムラン、マサダ要塞での発掘については、Beentjes, P.C., *The Book of Ben Sira in Hebrew: A Text Edition of All Extant Hebrew Manuscripts and a Synopsis of All Parallel Hebrew Ben Sira Texts* (Leiden / New York / Köln: E.J. Brill, 1997) 参照。
- (11) ここでヒエロニムスが発見したシラ書は、コヘレト書、雅歌とセットになっていたと報告されている。これはソロモンの書である箴言とシラ書とが入れ替わったものであるが、それでも「題材の類型に関して」ソロモンの書

と等しいのだと述べている。

- (12) ソロモンの知恵の著者がフィロンに帰せられていたことは、「ムラトリ正典表」(Muratorian fragment) から確認される (Swete, H.B., *An Introduction to the Old Testament in Greek* (Cambridge University Press, 1902): 267-69; 田川建三『書物としての新約聖書』(勁草書房、1997年) 154-97頁参照)。またアウグスティヌス『神の国』17.20でもソロモン著者説は懐疑的に扱われている。
- (13) ヒエロニウムスは389-92年にかけて、ヘクサプラに含まれるギリシア語 LXX を参照しながらラテン語訳聖書を改訂している。そのとき手掛けたのは、ガリア詩篇、ヨブ記、ソロモンの書、歴代誌であった。ここで述べている「かつて修正した版」とは、このときのソロモンの書のことである。また続くくだりの「旧版」「新版」とは相対的な用法であり、「旧版」は古ラテン語訳、「新版」はヘクサプラ改訂版、そして「我々の版」は今回のヘブライ語からの翻訳のことを指している。ソロモンの書には以上の3つの版があることを受けて、あとの「第三の器」という表現に繋がっていく。
- (14) いかにも地中海文化的な、葡萄酒を用いた比喩表現。大意は以下のとおり。古ラテン語訳は「第一の容器」に、ヘクサプラ改訂版は「第二の容器」に入れられ、共に酸化して悪くなってしまっているが、今回の翻訳は「第三の容器」に入れられることなく、「搾り機から最も純粋な容器にすぐさま委ねられ、その風味を損なわなかった」(=ヘブライ語から直接ラテン語訳され、原語の雰囲気を保存している)。

エズラ記・ネヘミヤ記の序文

解題

ヒエロニウムスは、エズラ記・ネヘミヤ記をヘブライ語からラテン語訳するに際して、自らを支持してくれる者たちからの期待と、敵対者たちからの中傷との板挟みになっていることをぼやいている。そこで少しでも中傷を少なくするために、名宛人のドムニオとロガティアヌスに対し、とりあえず翻訳を引き受けはしたけれども、それを公にしたりせずに、個人的な読書のためだけに用いるようにと釘を指している。そしてユダヤ人に則った正典論を述べたあと、以後ヒエロニウムス一流の聖書学となっていく重要な証言を残している。すなわち新約聖書における旧約聖書からの引用が、ヘブライ語テキストとは一致しても、LXXとは異なる場合があるというのである。このことについては「五書の序文」を参照されたい。最後に彼は、周到的論理構成に

基づいて、多くの写本が入り乱れているギリシア語の聖書しか読めないギリシア人たちよりも、正しい聖書の知識を持った自分がヘブライ語から直接訳したラテン語の聖書を読むことのできるラテンの方が恵まれていると締めくくっている。序文自体は、394年頃にドムニオとロガティアヌスに宛てて書かれた。

翻 訳

エズラ記におけるエウセビウス・ヒエロニムスの序文が始まる

あなたがたが要求していることを行うのか、拒否するのか——そのどちらがより難しいことなのか（の判断について）、私はまだ決めかねている。というのは、何かを課してくるあなたがたを拒否することは（私の）本意ではないが、かと言って、背負い込まされた荷物の重さが頭を押さえつけてきて、そのもとでは頭を上げるどころか、先に重荷につぶされてしまうほどだからである。妬み深い者どもの執拗さがこれに加わる。連中は、我々が書くものすべてを非難すべきものと見なしており、隠れて読んでいくせに、時に意に反して公の場でそれを引き裂かんばかりに罵っているのである。だから私は次のように叫び言わざるを得ない。「主よ、我が魂を解き放ちたまえ。不正の唇から、狡猾な舌から⁽¹⁾」〔詩篇119(120):2〕と。私がエズラ記をヘブライ語から（ラテン語へ）翻訳するようにとあなたがたが何遍も書いてきてから、3年にもなる。あなたがたは、まるでギリシア語やラテン語の巻物を持っていないかのように、また我々が翻訳したものはどれも、すべての者たちから直ちには唾棄されるべきではないというように繰り返し書いてくる。しかしある人も言っているように、「無益に努力したり、へとへとになるまで憎しみを追及したりするなどは、最も愚かしいことである⁽²⁾」。それゆえに私はあなたがたに願う。我が親愛なるドムニオ君とロガティアヌス君⁽³⁾、どうか個人的な読書だけで満足し、書物を公に持ち出したり、何を食べても満足しない者たちに食べ物を与えたりするようなことはしないでくれたまえ。そして他人を裁くことだけは知っているくせに、自分自身が何をしているかは知らない連中の傲慢さを避けてほしい。もし兄弟のうちで我々の訳したものに不満がある者たちがいるなら、彼らに写本を分け与えて、この巻物に大量にあるヘブライ語の（固有）名詞を明瞭にかつ間隔を開けて書き写すように勧めてやってくれたまえ⁽⁴⁾。なぜなら、写字生の入念な修正が維持されなければ、書物の修正など無駄であろうからである。

我々が編纂したもの（エズラ記）が一冊の書物であるということに驚いたり、アポクリファである第三と第四の書物⁽⁵⁾の戯言で喜んだりするべきではない。なぜならヘブライ人のもとでもエズラとネヘミヤの言葉は一卷にまとめられているからである⁽⁶⁾。

そして彼らのもとにもなく、24人の長老⁽⁷⁾にも由来しないものなどは、どこか遠くに投げ捨てられるべきだからである。しかし、もし誰かがあなたがたにセプトゥアギンタの翻訳者たちを反証として持ち出してくるならば——彼らの写本は多様だが、まさにその多様さ自体が、その写本が引き裂かれ、錯綜してしまっていることを証明している。少なくとも真理とは、分散しているなどとは主張され得ないものである——、その者に福音書を見せてやるといい。福音書には、旧約聖書からの引用ではあるが、セプトゥアギンタの翻訳者たちにはない多くの文言があるのである。たとえば、「彼はナザレ人と呼ばれるからである」〔マタイ2:23〕、「私はエジプトから私の子を呼んだ」〔マタイ2:15〕、「彼らは、彼らが突き刺した者を見るだろう」〔ヨハネ19:37〕。他にも多くの箇所があるが、それらはもっと浩瀚な著作のために取っておこう⁽⁸⁾。その者に、(上の箇所が旧約聖書中の)どこに書かれているか尋ねてみたまえ。彼がそれを述べることができなかつたならば、あなたがた自身が、これらの写本——最近我々が編纂したものだが、毎日のように中傷者どもの言葉で突き刺されているこれらの写本——から読み取っていただきたい。

しかし手短かに言うと、私がこれから取り上げようとするのが、確かに最も公平なところなのである。私が公にしたのは、ギリシア語(の翻訳)にはないものか、あるいは(ギリシア語に)あっても私が翻訳したのとは違うものである。どうして連中は(私の)翻訳を引き裂かんばかりにこき下ろすのであろうか。彼らはヘブライ人に尋ねるべきである。そして(ヘブライ語原典の)著者たち自身に照らして、私の訳に信頼を置くなり取り去るなりすべきなのである⁽⁹⁾。しかしもし彼らが言わば目を閉じたままで私を非難しようとし、ギリシア人の熱心さやよき心根を見習わないということであれば、話は別である。彼らギリシア人は、セプトゥアギンタの翻訳者たちのあと、キリストの福音が燦然と輝いている今にあって、古い律法の翻訳者であるユダヤ人やエビオン派⁽¹⁰⁾、すなわちアクィラはもちろん、シュンマコスやテオドティオンを綿密に読んでおり、「ヘクサプラ⁽¹¹⁾」におけるオリゲネスの仕事を通してそれらを教会に捧げている。しかしながら、むしろラテン人は、自分たちからギリシア(人)が喜び勇んで借用したがる何か(我々の訳)があることを認めて、大いに感謝すべきではなからうか。なぜなら、第一にすべての写本を持つためには大きな出費や限りない困難があるからであり、第二にすべての写本を持ったとしても、ヘブライ語を知らない者は、多くの(写本の)中でどれがより正しく語っているのか分からずに、かえって誤ってしまうだろうからである。実際ギリシア人の中でも最高の賢者である某も⁽¹²⁾、つい最近こうした過ちを犯した。彼はしばしば聖書の意味を無視して、(その都度)任意の翻訳者の誤りに従ってしまっているのである。しかし我々とはとにかくわずかながらもヘブライ語の知識を持ち合わせており、一方いやしくもラテン語(の知識)

は欠けていないのであるから、(上の例とは)別の基準に従って判断することができるし、また我々自身が理解していることを我々の言語で表現できるのである⁽¹³⁾。それゆえに、水蛇どもがシューシュー音を立てて野次ってこようとも、「シノンが勝ち誇って火を放とうとも⁽¹⁴⁾」、キリストの助けのおかげで私の雄弁が沈黙することは決してないだろうし⁽¹⁵⁾、きれぎれの言葉であっても、つかえながら語ることができる。望む者は読みたまえ、望まぬ者は投げて捨てればいい⁽¹⁶⁾。彼らは一画一画を精査し、一文字一文字を讒訴するに違いない。しかし私は連中の拒絶や憎しみによって妨げられるよりも、むしろあなたがたの愛情によって研究に駆り立てられるであろう。

序文終わり

訳注

- (1) ここでの詩篇の引用はガリア詩篇からのもの。すでにヘブライ語詩篇が存在しているはずだが、ガリア詩篇を選んだのは文脈によるものか。ガリア詩篇、ヘブライ語詩篇については、石川立／加藤哲平「ヒエロニウムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解(1)」『基督教研究』71巻2号(2009年)141-61頁参照。
- (2) サルススティウス『ユグelta戦記』3。ガイウス・サルススティウス・クリプス(Gaius Sallustius Crispus, 86BCE-c.34BCE)は、ローマの政治家、歴史家。ユリウス・カエサルの盟友として、共和制ローマで活躍した。著書に『カティリナ戦記』(前43年)、『ユグelta戦記』(前41年)などがある。
- (3) ドムニオ(Domnio)はローマの司祭。彼について詳細は不明だが、ヒエロニウムスは彼を *Ep.*47.3 (393年)において、「我らが時代のロト」(Loth temporis nostri, Domnion)と呼んで称賛している。また *Adversus Iovinianum libri* (393年)と関連する *Ep.*50 (393年)は、ドムニオ宛の書簡である(邦訳として、ウォルター・ダンフィー／大橋真砂子「ヒエロニウムス『ドムニオ宛書簡』(*Ep.*50):翻訳と注解」『南山神学』20号(1997年)125-43頁がある)。一方ロガティアヌス(Rogatianus)については、ヒエロニウムスの友人であること以外不明。おそらくはドムニオと同じようにローマの司祭であろう。
- (4) 「ヘブライ語の名詞」(hebraea nomina)を「明瞭にかつ間隔を開けて書き写す」(distincte et per intervalla transcribere)とは、すなわち文中のヘブライ語の固有名詞を、それと分かるように分かち書きするということか。
- (5) 第三エズラ記、第四エズラ記のこと。LXXには、歴代誌下・エズラ記・ネヘミヤ記などからなる「第一エズラ記」(1 Esdras)、エズラ記・ネヘミヤ記を繋げたものである「第二エズラ記」(2 Esdras)が存在する。そしてウルガー

タには、エズラ記とネヘミヤ記のヘブライ語からの翻訳であり、本序文が付されている「エズラ記」(Ezra)、第一エズラ記のラテン語訳である「第三エズラ記」(3 Esdras)、そして以上とはまったく異なる黙示文学の「第四エズラ記」(4 Esdras)が存在する。あとで述べているように、ヒエロニウムスはヘブライ語原典にある文書のみを正典として考えていたので、第三エズラ記と第四エズラ記は「アポクリファ」として区別すべきだと主張している。

- (6) マソラー伝承上では、エズラ記とネヘミヤ記はひとつの書物として扱われている。現在のようにふたつに分割するようになったのは4世紀のオリゲネス以降のこと。
- (7) 「24人の長老」とは、ヨハネ黙示録の次の箇所由来する。「玉座の周りに24の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった24人の長老が座っていた」[黙4:4]。ヒエロニウムスはこの記述と、ヘブライ語聖書の正典の文書数が24書であることを関連付けて考えている（「列王記の序文」、石川／加藤「翻訳と注解 (1)」148-55頁参照）。
- (8) 引用箇所については「五書の序文」参照。またここで言われている「もっと浩瀚な著作」とは、『最善の翻訳法について』(Ep.57)のことを指していると思われる。この書簡については「歴代誌の序文」の注(9)参照。
- (9) ここでは「尋ねる」(interrogare)、「(信頼を)置く」(adrogare)、「(信頼を)取り去る」(derogare)が言葉遊びになっている。rogareの合成動詞を用いるだけで、非常に豊かな表現をしているといえよう。
- (10) エビオン派(Ebionites)とは、割礼や安息日の遵守など、律法に従うことを旨とした2世紀のユダヤ人キリスト者の一派である。エウセビオス『教会史』6.17によると、シュンマコス(Ebionites)はエビオン派だと見なされている。またヒエロニウムスの*De viris illustribus liber* 54 (以下 *vir. ill.* と略す)によると、シュンマコス同様、テオドティオンもエビオン派であるとされている。以上より、ここでヒエロニウムスはシュンマコスとテオドティオンを指してエビオン派であると述べているのだと考えられる。「ヨブ記の序文」も参照(石川立／加藤哲平「ヒエロニウムス「ウルガータ聖書序文」翻訳と注解 (2)」『基督教研究』72巻1号(2010年)51-70頁の51-59頁)。ちなみに、もともと異邦人であったアクィラは、エルサレムにてキリスト教徒となるも破門され、さらにユダヤ教に改宗した改宗者である。ヒエロニウムスは*Comm. in Esaiam* III.viii.11-15においてアクィラをラビ・アキバの弟子であると述べている。
- (11) ἐξᾶπλοις.
- (12) 誰のことを指しているかは不明。ヒエロニウムスが「某」(quidam)という

言葉を用いるときは、多くの場合オリゲネス、ルフィヌス、ペラギウスなどを指しているが、この箇所では「つい最近」(nuper)という副詞が伴われているため、オリゲネスとは考えにくい。またあとの二人は「ギリシア人」ではない。

- (13) 以上の大意は以下のとおり。「このようないくつかの写本を持っているギリシア人よりも、私の訳が出るからには、今やラテン人であるほうが有難いはずである。ギリシア人も喜んで私の訳を借りたいくらいだろう。というのは、ギリシア語の写本をすべて所有するのは無理なので、私の訳ひとつがあれば済むことだし、またすべての写本を持ったとしても、ヘブライ語を知らないと、いろいろな訳のどれが正しいかわからない。しかし私はヘブライ語の知識を少しであれ持っているので、私の訳が決定版として判断の基準になるからである。しかも、ラテン語で書かれてあるので、ラテン人にはわかりやすい」。
- (14) ウェルギリウス『アエネーイス』2.329。第2巻ではカルタゴの女王ディードーに懇願されたアエネーアースがトロイア戦争について語っており、ちょうど有名なトロイアの木馬の場面に差し掛かったところ。シノンはトロイア軍をだましたギリシア人。ヒエロニウムスは、自らの敵対者を狡猾なシノンとして表現しているのであろう。
- (15) ここでは、「シューという音を立てて野次る」(sibilet ← sibilareの接続法現在3人称単数)と、「沈黙する」(silebit ← silereの直接法未来3人称単数)とが言葉遊びになっている。ほとんどbとlの位置を変えているだけであるが、非常に面白い効果を上げている。
- (16) 原文は *Legant qui volunt, qui nolunt abiciant* とキアスムス構造になっている。本序文ではこうしたヒエロニウムスの修辭的な表現が多く見られる。

歴代誌の序文

解題

ヒエロニウムス当時の教会では、LXXこそが正典であると考えられていた。それに対し、彼はヘブライ語からの翻訳を作成しようとしていたために、激しい反発に遭っていたわけだが、本序文ではなぜ彼が当時のLXXを受け入れられなかったかの理由が語られている。彼によれば、LXXは多くの写本が出回っており、どれが原テキストを反映しているのか判別できなくなってしまうのだという。実際人々

は、エジプトではヘシュキオス校訂版を、シリアではルキアノス校訂版を、パレスティナではオリゲネス校訂版をそれぞれ好き勝手に読んでいるような状態であった。一方新約記者たちは旧約聖書を引用する場合、LXXではなくヘブライ語テキストを用いており、とりわけヨハネ7:38では、イエス自身がヘブライ語テキストから直接引用している。それゆえにヒエロニウムスは、ラテン語旧約聖書の決定版を作るため、そして新約聖書を正確に読むために、LXXよりヘブライ語テキストの方が重要だと考え、ヘブライ語から直接ラテン語訳したわけである。以上のことは、文中で言及されている『最善の翻訳法について』(Ep.57) および「五書の序文」でも詳しく展開されている。序文自体は、395年頃にクロマチウスに宛てて書かれた。

翻 訳

歴代誌における聖ヒエロニウムスの序文が始まる

もしセプトゥアギンタの翻訳者たちの版が、改竄されておらず、彼らがギリシア語に翻訳したままになっているならば、司教のうちでも最も聖にして最も博識な我がクロマチウス君⁽¹⁾、私がヘブライ語の巻物をラテン語に翻訳するようにというあなたの要請は、無駄なことかもしれない。なぜなら彼らの版がかつては人の耳を捕え、(当時)生まれたばかりの教会の信仰を強めたことは、我々も黙して認めざるを得なかったからである。しかし今や地域によって異なった写本がもたらされて、かの真実なる古代の翻訳は損なわれ、傷つけられてしまっているために、多くのうちのどれが真正な写本なのかを判断すること、あるいは新しい作品を古い作品の中に組み入れること、そして嘲りに向けてくるユダヤ人どもから、ことわざに曰く「鳥の目を抜くこと⁽²⁾」は、我々の裁量のうちだとあなたは考えている。実際自分たちのセプトゥアギンタについて、アレクサンドリアとエジプトではヘシュキオスを権威ある編者として挙げており、コンスタンティノポリスからアンティオキアまでは殉教者ルキアノスの写本を認可している。またこれらの地方の中間の人々は、オリゲネスが苦心して作り上げたのちにエウセビオスとパンフィリオスが普及させたパレスティナの写本群を読んでいる。全世界が⁽³⁾、相互に異なるこれら三つの版について相争っているというわけである⁽⁴⁾。またオリゲネスは、ひとつの写本が互いに一致する他の写本と異なっていることが直ちに分かるように、四つの版の写本を一緒に並べ、それぞれの言葉が対応するように書いた⁽⁵⁾。そればかりか、さら大胆なことに、セプトゥアギンタにテオドティオンの版を混ぜ合わせ、その際(セプトゥアギンタに)欠けていたところにはアステリクスを、余分な付加と思われるところには小さな棒印(オベルス)を記したのである⁽⁶⁾。以上のように他の者らはかつて受け入れたものを保持していないのだ

が、そのことは不問に付されているし、また一般には統一する権威者はいなかったとされる70の小部屋の出来事のあとに、それぞれの小部屋が開け放たれてしまった⁽⁷⁾。さらにまた、教会ではセプトゥアギンタの翻訳者たちが知らなかったようなことまでも読んでいるというのに⁽⁸⁾、なぜ我がラテン人は私を支持してくれないのであろうか。私はヘブライ人たちや、そして彼ら以上に重要なことなのだが、権威者である使徒たちにさえ自分の仕事を推奨できるほど（正確に）、古代の傷つけられていない版に対応して新しい版を作成したというのに。ところで私は最近『最善の翻訳法について⁽⁹⁾』という書物をものし、次のことを明らかにした。すなわち福音書に関しては、「私はエジプトから私の息子を呼んだ」〔マタイ2:15〕、「なぜなら彼はナザレ人と呼ばれているからである」〔マタイ2:23〕、「彼らは、彼らが突き刺した者を見るだろう」〔ヨハネ19:37〕、使徒（パウロ）に関しては、「目が見ず、耳が聞かず、そして人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は自らを愛する者らに準備した」〔一コリ2:9〕等々に相当する箇所が、（セプトゥアギンタではなく）ヘブライ人の書物の中にこそ見出されることを示したのである。確かに使徒や福音書記者らはセプトゥアギンタの翻訳を知っていたのであるが、ではセプトゥアギンタにないこれらの言葉をどこから語り得たのであろうか⁽¹⁰⁾。（さらに）旧約新約両聖書の著者たる我らが神キリストは、ヨハネによる福音書の中で曰く、「私を信じる者は、聖書が語るとおり、その腹から生命の水が川となって流れる」〔ヨハネ7:38〕。ここには確かに、（聖書に）書かれていると救い主が証言していることが書かれている⁽¹¹⁾。ではそれはどこに書かれているのか。セプトゥアギンタにはそのような箇所はないし、アポクリファを教会は知らない⁽¹²⁾。それゆえに、ヘブライ人の書物に戻らなければならないのである。なぜならそこから主は語り、またそこから弟子たちも範を取っているからである。私は古代の人々については平穩に語ろう。しかし私の敵対者どもに対してはただ反駁する。連中は犬のような歯で私を齧ってくる。そして公には（私の訳を）こきおろしているくせに、隠れたところでは読んでいます。つまり同じ人物が非難者でもあれば、弁護者でもあるのである。なぜなら、あたかも徳と過失が事柄そのものの中にあるのではなく、著者によって変わるかのように、連中は私については非難していることを、別の人については賛同しているからである⁽¹³⁾。他の点については、私がかつてセプトゥアギンタの翻訳者たちの版をギリシア語について修正した上で、我々（の仲間）に与えたことや⁽¹⁴⁾、あるいは私が兄弟の集まりにおいていつも議論している者たちの敵であるとは見なされてはならないことなどについて考えている。さて、私はダブレイアミン⁽¹⁵⁾〈Dabreiamin〉、すなわち日々の言葉（歴代誌）を翻訳したわけだが、それを次のような仕方で行った。つまり写字生たちの過失によって混乱した、一語と誤解させる狭すぎる語間と名前の森、そして意味の野蛮さを、行のコロンによって分けたので

ある⁽¹⁶⁾。もし他の者たちが耳を貸さないのであれば、ヒスメニウスに従って、「私は私自身と仲間のために歌おう⁽¹⁷⁾」。

序文終わり

訳注

- (1) クロマティウスについては、「ソロモンの書の序文」の注(1)参照。
- (2) キケロー『ムーレーナ弁護』25。「烏の目を抜く」(*cornicum oculos configere*)とは、抜け目のない人を欺くという意味であり、「生き馬の目を抜く」とほぼ同意。キケローの本文においても、ことわざとして引用されている(クインティリアヌス『弁論家の教育』VIII.3.22も参照せよ)。この文脈では、ユダヤ人と聖書について論争する場合に、いくつもあるLXX写本のうちからどれかを恣意的に選択し、聖書をよく知っている彼らを出し抜けばいいとクロマティウスが考えているという意味であろう。
- (3) ヒエロニウムスはここで、エジプトからシリアまでを「全世界」(*totus orbis*)と表現しているが、*Comm. in Sophoniam libri ii.8*では、ユダヤ人が離散している「全世界」を、ガリア、ブリタニア、ヒスパニア、イタリア、アフリカと述べている。こうした証言は、古代の地中海世界の人々がどこまでを「世界」と見なしていたかを知るために重要である(Krauss, S., "The Jews in the Works of the Church Fathers," *The Jewish Quarterly Review* 6 (1894): 225-61の242, n.1参照)。
- (4) 「三つの版」(*trifolia varietas*)という言い回しで知られる有名な箇所。ここでのヒエロニウムスの証言から、LXXには3つの改訂が存在したと考えられている。①オリゲネスのヘクサプラ(Hexapla, 六欄聖書)の第5欄を、エウセビオスとパンフィリオスが独立した書物としてパレスティナ地方で普及させた版(Hexaplaric Recension)、②ヘシュキオスがエジプトで作成したヘシュキオス校訂版(Hesychian Recension)、③ルキアノス(*vir. ill. 77*)がヘクサプラの第5欄を底本としてシリアで作成したルキアノス校訂版(Lucianic Recension)の3つである。Swete, *Introduction*, 59-86; Jellicoe, S., *The Septuagint and Modern Study* (Oxford: The Clarendon Press, 1968): 100-71; Jobes, K.H. / Silva, M., *Invitation to the Septuagint* (Michigan: Baker Academic, 2005): 45-56; Sutcliffe, E.F., "Jerome," *The Cambridge History of the Bible*, ed. by G.W.H. Lampe (Cambridge University Press, 1969) 2: 80-101の特に95-96等参照。

- (5) オリゲネスのテトラプラ (Tetrapla, 四欄聖書) のこと。250年頃にテュロスにおいて作成された。これはヘクサブラから最初の二欄を取り除き、残りのギリシア語訳である③アクィラ訳、④シュンマコス訳、⑤LXX、⑥テオドティオン訳のみを並べたもの。エウセビオス『教会史』vi.16.4に報告されている (Swete, *Introduction*, 65-67; Jellicoe, *The Septuagint*, 113-18参照)。
- (6) オリゲネスによる LXX へのテオドティオン訳の挿入は、ヨブ記などに見られる。「オリゲネスはこれらの記号 (オベルス・アステリクス記号) のもとで、付加部分やらテオドティオンから採用した部分やらを、古代の翻訳 (セプトゥアギンタ) 上に挿入し、付加部分が (セプトゥアギンタでは) 欠けてしまっていると証明しているのである」(「ヨブ記の序文」、石川／加藤「翻訳と注解 (2)」51-59頁)。
- (7) LXX の成立縁起にまつわる二様の伝承のこと。LXX の翻訳に際し、『アリストアスの手紙』によると、翻訳者である長老たちは互いに訳文を校合しながら翻訳を完成させたとされているのに対し、フィロンやエイレナイオスによると、長老たちは別々の部屋に分かれて翻訳したのにもかかわらず、聖霊の働き (すなわち「統一する権威者」) によって、出来上がった訳文が一致していたという。ここでヒエロニムスは、教会では後者の説が優勢であるにもかかわらず、実際の LXX テキストはさまざまに入り乱れしまっていることを皮肉っている。
- (8) 例えばヒエロニムス当時の教会は、ダニエル書に関して、LXX ではなくテオドティオン訳を読んでいた。「セプトゥアギンタの翻訳者たちに基づく預言者ダニエルを、主なる救い主の教会は読んでいない。彼らはテオドティオンの版を使っているのだが、なぜこのようなことが起こったのか私は知らない」(「ダニエル書の序文」、石川／加藤「翻訳と注解 (1)」155-60頁)。
- (9) パンマキウス宛 *Ep.*57 (395年) のこと。本序文においてヒエロニムス自身が題名をつけていることから、『最善の翻訳法について *De optimo genere interpretandi*』とも呼ばれる。詳しくは、Bartelink, G.J.M., “Quelques observations sur la Lettre LVII de S. Jérôme,” *Revue Bénédictine* 86 (1976): 296-306; idem, *Hieronymus, Liber de optimo genere interpretandi (Epistula 57): Ein Kommentar* (Leiden: E.J. Brill, 1980); Banniard, M., “Jérôme et l'elegantia d'après le De optimo genere interpretandi,” *Jérôme entre l'occident et l'orient: XVI^e centenaire du départ de saint Jérôme de Rome et de son installation à Bethléem*, ed. by Y.-M. Duval (Paris: Études Augustiniennes, 1988): 305-22参照。
- (10) それぞれの箇所に関しては「五書の序文」参照。大意としては以下のとおり。

ヒエロニウムスが引いてきている4つの箇所は、新約聖書中で引用されている旧約聖書の文言であるが、同じギリシア語で書かれている LXX の該当箇所とは一致せず、むしろヘブライ語テキストと一致している。というのも、福音書記者や使徒パウロは LXX の存在を知ってはいたが、旧約聖書を引用する場合に、LXX ではなくヘブライ語原文を自らギリシア語訳して引用しているからである。すると福音書やパウロ書簡を正確に読み、引用の意図を理解するためには、「ヘブライ語の書物に戻らなければならない」。

- (11) ヨハネ7:38に関しては「五書の序文」参照。この箇所は本序文が初出。わざわざ「(聖書に)書かれていると救い主が証言していることが書かれているのである」と断っていることから、ヒエロニウムスがこの箇所を特に重要だと考えていることが見て取れる。というのも彼によれば、ここではヨハネ福音書のイエス自身の台詞の中で旧約聖書が引用されており、かつそれが LXX の該当箇所と一致せず、ヘブライ語テキストと一致しているからである。なるほど上の4箇所における不一致も重大な問題であるが、それ以上に注意を払うべきイエス自身の言葉を正確に理解するためにも、やはり「ヘブライ人の書物に戻らなければならない」。
- (12) *Ep.57.9*によると、当時一コリ2:9の引用は、「エリヤの黙示録」という現存しない「アポクリファ」からのものだと見なされていた。しかしヒエロニウムスは「五書の序文」において、これはイザヤ書(64:3)からの引用であると述べている。
- (13) 「賛同する」(*probare*)と「非難する」(*reprobare*)とが言葉遊びになっている。もとになる動詞に *re-* を付すだけで、上手に正反対の意味を表している。
- (14) 彼がヘクサプラ校訂版を参照しながら改訂したラテン語訳聖書を指している。これほど LXX に関しても骨折っているのだから、自分が LXX の敵であるなどとは見なされてはならないと言いたいのであろう。改訂については「ソロモンの書の序文」の注(13)参照。
- (15) 歴代誌は LXX においては、サムエル記・列王記にはない残りの情報という意味で、「残りのもの」(*Παραλειπομένων*)と題されているが、ヘブライ語ではヒエロニウムスが「日々の言葉」(*Verba dierum*)とラテン語訳しているように、「デイヴレイ・ハヤミーム」(*דְּבַרֵי הַיָּמִים*)と呼ばれる。
- (16) 「狭すぎる語間」(*inextricabiles morae*)、「名前の森」(*silva nominum*)、「意味の野蛮さ」(*sensuum barbaries*)。ヒエロニウムスは「エズラ記の序文」においても、「ヘブライ語の名詞」を「明瞭にかつ間隔を開けて書き写す」ことを写字生に支持するよう頼んでいる。「エズラ記の序文」の注(4)参照。

(17) キケロー『ブルートゥス』187、ウァレリウス・マキシムス3.7。

五書の序文

解題

本序文は、ヒエロニムスの「ヘブライカ・ウェリタス」のロジックにとって決定的な根拠となる、新約記者による旧約聖書の引用において、LXXとは異なるがヘブライ語テキストとは一致する5箇所についてのまとめとなる証言を含んでいる。すでに彼は、*Ep.*20.2 (383年)、*vir. ill.* 3 (392年)において、マタイによる2つの引用箇所(2:15←ホセア11:1、2:23←イザヤ11:1)を挙げている。それに加えて、「エズラ記の序文」(394年)では、ヨハネによる引用箇所(19:37←ゼカリヤ12:10)を付け加えた。福音書以外では、*Ep.*57.9 (395年)において、第一コリント書(2:9←イザヤ64:3)とローマ書(9:33←イザヤ8:14)を挙げている。そして「歴代誌の序文」(395年)においては、*Ep.*57のローマ書の代わりに、ヨハネ(7:38←箴言18:4 / 5:16?)を新たに追加した²。以上の説明に続いてヒエロニムスは、なぜ新約聖書における旧約聖書の引用がLXXとは異なるのかという疑問に対し、『アリストテアスの手紙』の伝承を敷衍しながら説明している。そして「預言者」と「翻訳者」との違いについて述べたあと、自分はLXX訳者よりも使徒たちの証言を優先すると高らかに宣言している。序文自体は、403年頃にデシデリウスに宛てて書かれた³。

翻訳

五書における司祭聖ヒエロニムスの序文が始まる

我がデシデリウス君からの要望の手紙を私は受け取った。彼はダニエル同様、未来のある種の予兆によって名前を得たのである⁽¹⁾[VG ダニエル9:23参照]。彼は(手紙の中で)私がヘブライ語からラテン語に翻訳した五書を、我々の(仲間の)耳に届けるよう懇願している。これはまったくもって危険な仕事であり、中傷者どもの罵りにさらされることになる。連中はまるで葡萄酒のように(訳の)質を吟味し、私がセプトゥアギンタの翻訳者たちを侮辱するために、古い訳の代わりに新しい訳を作り出していると主張している。しかし私は、事あるごとに証言してきたように、神の天幕(教会)に私のできる限りのものを精一杯提供しているのであり、またある人の財力が別の人々の貧しさによって貶められるようなことはないのである⁽²⁾。ところで、以上のことを私が敢えてしているときに、オリゲネスの研究が私を刺激した。彼は古い

版にテオドティオンの訳を混ぜ合わせたが、(その際) アステリクスとオベルス、すなわち星印(※)と槍印(÷)で作品全体を区別した⁽³⁾。そうすることで彼は、以前は差し引かれていたものを(星のように)輝かせ、一方過剰なものは何であれ(槍でするように)減らし、刺し貫いたのである⁽⁴⁾。また、とりわけ権威ある福音書記者や使徒たちが私を刺激した。彼らの書物の中で我々は、旧約聖書から引用された多くの箇所を読み取るのだが、それらは我々の書物にはないのである。例えば次のような箇所である。「私はエジプトから私の子を呼んだ」[マタイ2:15]、「なぜなら彼はナザレ人と呼ばれているからである」[マタイ2:23]、「彼らは、彼らが突き刺した者を見るだろう」[ヨハネ19:37]、「その腹から生命の水が川となって流れる」[ヨハネ7:38]、「目が見ず、耳が聞かず、そして人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は自らを愛する者らに準備した」[一コリ2:9]、そして適切な「引照箇所⁽⁵⁾」が見当たらない他の多くの箇所である。それではこれらの引照箇所がどこに書かれているのかを彼ら中傷者どもに尋ねてみよう。連中がそれに答えられないならば、我々がヘブライ語の書物からそれを明らかにしてみせよう。第一の典拠はホセア書⁽⁶⁾に、第二はイザヤ書⁽⁷⁾に、第三はゼカリヤ書⁽⁸⁾に、第四は箴言⁽⁹⁾に、第五は同様にイザヤ書⁽¹⁰⁾にある。多くの人はこのことを知らず、(典拠として)アポクリファの妄想を探したり⁽¹¹⁾、真正な書物よりもイベリアの子守唄を優先したりしている⁽¹²⁾。誤りの原因を説明することは私の仕事ではない。ところでユダヤ人たちは、セプトゥアギンタの翻訳は注意深い協議の上で為されたものだと言っている。それは、唯一なる神の崇敬者であるプトレマイオス(・フィラデルフォス)が、ヘブライ人たちの間で二つの神を見つけるようなことがないようにするためであった。彼はヘブライ人たちを大いに優遇した。というのも、彼らがプラトンの教えに同意していると見なされたからである。聖書は至るところで父と子と聖霊について何か聖なる事柄を証しているのだが、ヘブライ人たちはそれを別様に翻訳したり、完全に黙殺したりした。その結果、彼らは王を満足させるとともに、信仰の秘義を広めることもなかったのである⁽¹³⁾。私はアレクサンドリアの70の小部屋(の話)をでっち上げた最初の作者が誰なのか知らない。翻訳者たちはそれらの小部屋に分けられたのにもかかわらず、同じことを書いたという。同じプトレマイオス王の「守護人⁽¹⁴⁾」であるアリストアスや、はるかの前ではヨセフスは、そのようなことは何も述べておらず、翻訳者たちがひとつのバシリカに集められて申し合わせをしたと書いている⁽¹⁵⁾。彼らが預言したとは書いていない。占い師(預言者)であることと、翻訳者であることは別である。前者の場合は聖霊が未来のことを預言するが、後者の場合は学問や語彙の豊富さが、理解したことを翻訳するのである。もしトゥリウス(・キケロー)が、クセノフォンの『家政論』やプラトンの『プロタゴラス』やデモステネスの『クテシフォン擁護』を、レトリックから霊

感を受けて翻訳したわけではないと見なされるべきならば、聖霊は旧約聖書についてセプトゥアギンタの翻訳者を通して翻訳しながら、一方（別のやり方で）使徒たちを通して証言したことになる。すると、前者が語ってもいないようなことを、後者が「それは（旧約聖書に）書いてある」と偽ったことになってしまう⁽¹⁶⁾。（そうではないとすれば）どういうことになるのか。我々は昔の人（セプトゥアギンタの翻訳者）たちを断罪すべきなのだろうか。決してそうではない。そうではなく、そのような先達の熱心な努力のあとに、神の家において我々のできることに努めるのである。彼らはキリストの到来の前に、彼らが知らなかったことを覚束ない文章で翻訳した。しかし我々は、キリストの受難と復活のあとに、預言というよりは歴史を書いている。耳にしたこと（預言）と、目にしたこと（歴史）は別様に語られる。すなわち、我々はより良く理解していることこそを、より良く翻訳できるのである。それゆえに、聞け敵よ、中傷者よ耳を貸せ、私はセプトゥアギンタの翻訳者たちを断罪もしないし、非難もしないが、断固として彼らすべてよりも使徒たちを優先させる。使徒たちの口を通してキリストが私に鳴り響いてくるのである。私は使徒たちがいくつかの霊的な賜物の中で預言者たちより前に位置づけられていることを読んで知っているが、その中で翻訳者たちなどほとんど最後の位置を占めているにすぎない⁽¹⁷⁾〔一コリ12:28参照〕。なぜお前⁽¹⁸⁾（中傷者）は嫉妬によって（私を）苦しめるのか。なぜお前は無知な者たちの心を、私に対抗させて煽り立てるのか。もしどこかで私が翻訳において間違っているように思われるなら、ヘブライ人たちに尋ねてみよ。またさまざま町の教師たちに相談してみればいい。彼らがキリストについて知っていることが、お前の持っている書物には書かれていないのだ。とはいえ、もし使徒たちの用いた証言が矛盾しているとヘブライ人たちが証明したとすれば、またラテン語の写本の方がギリシア語よりも正しく、ギリシア語の方がヘブライ語よりも正しいとすれば、話は別である。しかし実際これらの証言は妬む者たち（の証言）には反している。さて君にお願ひする、最愛なるデシデリウス君。これほど大きな仕事を私に引き受けさせ、創世記から取りかからせた君が、祈りをもって助けてくれることを。旧約の諸書が書かれたときと同じ聖霊によって、私がそれらをラテン語へと翻訳することができるように。

序文終わり

訳注

- (1) デシデリウス（Desiderius）はローマの司祭で、ヒエロニムス *Ep.47* の名宛人。ヒエロニムスはここで、三重の言葉遊びをしている。彼が「デシデリウス」から受け取ったのは「要望の手紙」（*desiderata epistula*）であり、デ

シデリウスはダニエル〔ウルガータ版9:23〕同様、「要望の男」(vir desideriorum) だと言っている。

- (2) ヒエロニムスはここで自らを卑下しつつ、自分が LXX を貶めようとして仕事をしているわけではないと弁明している。すなわち、「ある人の財力」(= LXX の価値) が、「別の人々の貧しさ」(= ヒエロニムスの訳) によって貶められることなどないということ。
- (3) オリゲネスによる LXX へのテオドティオン訳の挿入、アステリクス記号およびオベルス記号については、「歴代誌の序文」とその注 (6) 参照。
- (4) 「以前には差し引かれていたもの」とは、LXX においてヘブライ語原文から訳し落とされていた部分、「過剰なもの」とは、LXX においてヘブライ語原文に対し付加されていた部分を表す。
- (5) συνταγμα.
- (6) マタイ2:15←ホセア11:1。「《私はエジプトから私の子を呼んだ》と主が預言者を通して言っていたことが実現するためであった」〔マタイ2:15〕の典拠は、「私はエジプトから私の子を呼んだ」〔ホセア11:1〕である。同箇所は LXX においては、「私はエジプトから彼の子を呼んだ」となっている。すなわち新約・ヘブライ語では「私の子」だったところが、LXX では「彼の子」に変わっているのである。ヒエロニムスは *Comm. in Osee III.xi.1-2* においてこの箇所を注解して次のように述べている。「誰にも疑いないことに、マタイはこの箇所について、ヘブライカ・ウエリタスに基づいた証言を採用したのだ。それゆえに、我々の翻訳を中傷する者は、書かれていることを認めるべきである。これについて、福音書記者はこの(ヘブライ語の)証言を採用し、救い主なる主のことだと解釈した。なぜならば、主はエジプトからイスラエルの地へと呼び戻されたからである」。
- (7) マタイ2:23←イザヤ11:1。「《彼はナザレ人と呼ばれている》と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった」〔マタイ2:23〕の典拠は、ヒエロニムスによれば、「エッサイの幹からは枝が出てきて、その根からは芽(ネツェル)が育つ」〔イザヤ11:1〕だという。同箇所は LXX においては、「エッサイの根からは枝が出てきて、その根からは花が咲く」となっている。ヒエロニムスの注解 (*Comm. in Esaiam IV.xi.1/3*) の大意は以下のとおり。彼はまず LXX を底本としつつ、ユダヤ人の解釈として、エッサイの根から出た枝と花とは神のことを指しているとする。しかし自分としては、枝は聖女マリア、花は救い主イエスのことを指していると考える。そもそもヘブライ語に照らせば、エッサイの「根」ではなく「幹」であり、

「花」ではなく「芽」である。すなわちこの箇所は、「エッサイの幹（ダビデの家系）からは枝（マリア）が出てきて、その根からは芽（イエス）が育つ」という文章になっている。教会では長い間、いくら探してもマタイ2:23の引用がどこからのものか分からなかったが、「ヘブライ人の教養ある者ら」は、この箇所から取られたものとみなしている。なぜならヘブライ語の「芽」にあたる「ネツェル」(נֶצֶר)のツァディ (צ) という文字をラテン語では正確に発音できないため、それが「ナザレ人」(Nazareus) を表しているものだとは分からなかったからである。この箇所については、Lyonnet, S., “« Quoniam Nazaraeus vocabitur » (Mt 2, 23) : L' interprétation de S. Jérôme,” *Biblica* 25 (1944): 196-206参照。

- (8) ヨハネ19:37←ゼカリヤ12:10。「さらに聖書の別の箇所によれば、《彼らは、彼らが突き刺した者を見るだろう》」〔ヨハネ19:37〕の典拠は、「彼らは、彼らが突き刺した者である私を見つめる」〔ゼカリヤ12:10〕である。同箇所はLXXにおいては、「彼らは私を見つめる。なぜなら彼らは踊りまわって喜んだからである」となっている。すなわち新約・ヘブライ語では「突き刺した」となっているところが、LXXでは「踊りまわって喜んだ」に変わっているのである。ヒエロニムスの *Comm. in Zachariam* III.xii.9-10によれば、ラテン文字のDとRにあたるヘブライ文字のダレット (ד) とレーシュ (ר) はかたちが非常に似ているため、LXX訳者は、もともと「彼らは突き刺した」(DACARU / דַּאֲרָו) となっていたところを、「彼らは踊りまわった」(RACADU / רַאֲדָו) と読んだのだという。しかもそれは誤読というよりは故意の読み換えであり、何となればこの箇所が暗示しているのは当然イエスの磔刑の場面であるが、マタイ27:40にあるように、ユダヤ人たちはイエスが磔にされているのを「頭を振りながら」囃したてていたのではないかとヒエロニムスは述べている。
- (9) ヨハネ7:38←箴言18:4 / 5:16?。「私を信じる者は、聖書に書いてあるとおり、《その腹から生命の水が川となって流れる》」〔ヨハネ7:38〕の典拠は、ヒエロニムスによれば箴言であるとされているが、具体的にどの箇所かは不明である。本翻訳の底本である R.Weber と R.Gryson 校訂版の注においては、ここでヒエロニムスが念頭に置いているのは箴言18:4だとされているが (*Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007): 3)、J.C. Elowsky は箴言5:16を挙げている (*Ancient Christian Commentary on Scripture: New Testament IVa John 1-10* (Illinois: Inter Varsity Press, 2006): 265, n.7)。なぜこうした食い違いが起こるかという点、箴言に関するヒエロ

ニウムスの注解書が存在しないため、この箇所に関して彼が言わんとすることを、詳しく彼自身の言葉で確かめることができないからである。しかも、箴言のいずれの箇所も他の引用箇所でも前提とされている条件に相当とは思われない（箴言5:16のヘブライ語原文は LXX に対して大きな意味の違いがあるが、ではそれが新約の引用に一致するかというと、首をひねらざるを得ない）。いずれにせよ、ヒエロニウムスが「歴代誌の序文」で述べているように、ヨハネの引用はイエス自身の台詞であり、そこに上のような不一致が認められるがゆえにこの箇所が挙げられていることは間違いない。箴言5:16「あなたの水源は外に溢れ、水の小川は通りに」、同 LXX「水がお前のために水源から溢れることのないように、お前の水がお前の通りへと横切るように」。箴言18:4「人の口から出る言葉は深い水、流れる急流、知恵の泉」、同 LXX「人の心の言葉は深い水、川と生命の泉が流れていく」。

- (10) 一コリ2:9←イザヤ64:3。「しかし次のように書かれている。《目が見ず、耳が聞かず、そして人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は自らを愛する者らに準備した》」〔一コリ2:9〕の典拠は、「昔から聞いた者も耳にした者もない。目は見なかった、神よ、あなた以外（の神）が彼を待つ者に（わざを）なしてくれることなど」〔イザヤ64:3〕である。同箇所は LXX においては、「昔から、我々は聞かなかったし、我々の目は見なかった。あなた以外の神と、待つ者らにあわれみをなすあなたのわざ以外のわざを」となっている。この箇所もヒエロニウムスの意図を汲むことの非常に難しい箇所である。彼は *Comm. in Esaiam XVII.lxiv.4-5*において次のように説明している。「あたかもヘブライ人の中のヘブライ人のように、使徒パウロはコリント人に向けて書いた書簡の中で、聖書の権威からこの証言のパラフレーズを採用した。彼は、言葉から言葉を翻訳するのではなく——そうすることにはまったく頓着していない——、意味を真理として説明したのである。これを彼は自分が意図したことを強めるために用いた」。

- (11) 「歴代誌の序文」の注 (12) 参照。
- (12) ここで暗示されているのは、アウィラの司教プリスキリアヌス (*Priscillianus, vir. ill.* 121) とその一派との論争だと思われる。彼の教説はイベリア半島で猖蹶を極め、ピレネー山脈を越えてフランスにまで及んだ。しかし魔術や姦淫を行ったかどで皇帝マグヌス・マキシムス (335-388) の怒りを買って、385年に処刑された。「子守唄」(*nenia*) とは、読んでいると眠たくなってしまいうまくならぬ書物という意味であろう。プリスキリアヌスについては、Ferreiro, A., “Sexual Depravity, Doctrinal Error, and Character

Assassination in the Fourth Century: Jerome against the Priscillianists,” *Studia Patristica* 28 (1993): 29-38参照。

- (13) ヒエロニムスが引用した5箇所に関して、なぜ新約の引用とヘブライ語が一致し、LXXが異なるかの理由説明。エルサレムから聖書翻訳のために呼び寄せられた72人の長老たちは、プトレマイオス王から大いに歓待された。というのも、王はユダヤ人が「唯一なる神」を信奉していると聞いて、親近感を抱いたのである。しかし王にとっての「唯一なる神」とは「プラトンの神」であり、ユダヤ人の神とは別物であった。長老たちは王の誤解に気づいていたが、王に悟られぬよう、翻訳の際に聖書の文言を変えてしまったのである。しかし福音書記者やパウロは、旧約聖書の文言を引用する場合、自らヘブライ語から直接ギリシア語に翻訳しているため、上のような不一致が起こってしまうのであった。
- (14) υπερασπιστης.
- (15) 『アリストテアスの手紙』によれば、ユダヤの聖典をアレクサンドリアの図書館に納めることを望んだプトレマイオス王フィラデルフォスは、72人のユダヤの長老たちをエルサレムからエジプトへと招聘した。長老たちは、互いの翻訳を比較しつつ、72日間で翻訳を完成させたという。つまり、誰か「統一する権威者」がいたわけではなく、72人の長老たちが訳文を校合させて、ひとつのテキストを作ったのである。以上のことは、後世ではヨセフス『ユダヤ古代誌』12.12-118が伝えており、またヒエロニムスもこちらの伝承を支持している。ところがフィロンの『モーセの生涯』II.37-40によると、長老たちは、あたかも靈感を受けた預言者のように、また一人の目に見えない後見人に語りかけられたかのように、寸分違うことなく同じ翻訳を作成したと伝えられている。さらにエイレナイオス『異端反駁』3.21.2 (=エウセビオス『教会史』5.8.11-14)になると、長老たちがそれぞれ別の70の部屋で作業したにもかかわらず、出来上がった翻訳が一致していたという話が付け加わった。こちらの伝承は、アウグスティヌス『神の国』18.42; 43などに伝えられている。興味深いことに、ラビ・ユダヤ教においても、タルムード（メギラー9a-b）にこちらの伝承が残っている。以上の伝承の違いについては、Wasserstein, A. / Wasserstein, D.J., *The Legend of the Septuagint: From Classical Antiquity to Today* (Cambridge University Press, 2006): 27-83参照。
- (16) 以上の部分の大意は以下の通り。「翻訳というものは、《学問や語彙の豊富さ》によってなされるものであるはずだが、キケローでさえ預言者のように聖霊によって翻訳をしたのだとするならば、旧約聖書の場合も聖霊が翻訳を

したことになる。しかし LXX と使徒たちの証言はしばしば食い違っている。では同じ聖霊が LXX 訳者と使徒たちに別々の翻訳をさせたのだろうか。そうではない。使徒たちはヘブライ語の知識をもとに翻訳・引用している。すると LXX と新約の引用が食い違う場合、聖霊が訳した LXX より使徒たちこそが誤っていることになってしまう。そのようなことはあり得ない。となれば翻訳は知識の問題であって聖霊の問題ではないということになるし、また翻訳を変更する事情のあった LXX 訳者よりも使徒たちの方が正しいということになる」。

- (17) 一コリ12:28によると、教会の中の順序は、使徒、預言者、教師、力ある者、癒しの賜物を持つ者、助ける者、管理する者、異言を語る者となっている。エフェソ4:11も参照せよ。
- (18) 本序文はもともと友人のデシデリウスに宛てられたものであるから、本来二人称はデシデリウスを指すはずであるが、ここでは中傷者に呼びかけていると思われる。おそらくヒエロニムスは口述しながら感情が高ぶり、思わず中傷者に対して「お前」と呼びかけてしまったのだろう。

注

- 1 翻訳・監修を石川が、翻訳・解題・訳注を加藤が担当した。
- 2 Bartelink, G.J.M., "Quelques observations sur la Lettre LVII de S. Jérôme," *Revue Bénédictine* 86 (1976): 296-306; idem, *Hieronymus, Liber de optimo genere interpretandi (Epistula 57): Ein Kommentar* (Leiden: E.J. Brill, 1980): 80-82.
- 3 「五書の序文」の英訳と簡単な注解が Rebenich, S., *Jerome* (London and New York: Routledge, 2002): 101-104に収録されている。また「五書の序文」の注における LXX の私訳は、Pietersma, A. / Wright, B.G. (eds.), *A New English Translation of the Septuagint* (New York and Oxford: Oxford University Press, 2007) を参照した。

* 本稿は平成22年度科学研究費補助金ならびに日本学術振興会特別研究員研究奨励金による研究成果の一部である（加藤哲平）。